

30
—
八

国
語

国
語

語

国
語

注
意

- 1 問題は **1** から **5** までで、13 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出**しなさい。
- 5 答えは**特別の指示**のあるもののほかは、各問の ア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や**。**。や**などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 貪るヒるように本を読む。
- (2) 折節ヒの移り変わりを感ずる。
- (3) 性根ヒをすえて困難に立ち向かう。
- (4) あまり世間体ヒを気にする必要はない。
- (5) 仕事がたくさん残っていて青息吐息ヒだ。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 組織ヒのカナメとなる人が必要だ。
- (2) チクバヒの友に再会した。
- (3) メイジヨウヒしがたい美しさに感動する。
- (4) 花火は夏のフウブツヒだ。
- (5) イミシンヒチョウな言い方が気になった。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

一九二〇年、沖亀乃介は敬愛する陶芸家バーナード・リーチの強い求めに応じて、同じく陶芸を志す濱田庄司とともに助手として、リーチの祖国であるイギリスに渡った。二人は、イギリスのセント・アイヴスという町で、リーチの工房で働く職人たちを熱心に指導する。弟子の一人であるシンシアは、家族を養うため、飲食店で働きながらも陶芸職人を目指していた。

昼休みはいつも、ポタリーの近くを流れている小川のほとりに出かけていって、亀乃介とシンシアは弁当を広げる。今日はポタリーの暖炉で炊いたご飯で作った握り飯だ。シンシアは、自宅から持参したキュウリのサンドウィッチの包みを開いた。

握り飯の白米はジャワ米だったが、鍋にレンガでふたをして炊けば、そこそこのご飯がで上がる。亀乃介はその日初めて握り飯を作ったのだった。

「まあ、それはいったい何？」

大きな握り飯に亀乃介がかぶりつくのを見て、シンシアはびっくりして尋ねた。

「ああ、これはね、おにぎりというんだ。日本人はこいつが大好きなんだよ。食べてみるかい？」

亀乃介は、もうひとつ持ってきてきた握り飯をシンシアに差し出した。シンシアは、おっかなびっくり、ちよつとかじって、かみしめてから、

「あら、なんだか甘いのね。おいしいわ。」

ぺろりとたいらげてしまった。

「日本って、きつとおいしい食べ物がいっぱいあるのね。ほかにはどんなものがあるの？」

「そうだな。たとえば、刺身とか、納豆とか……。」

「サシミ？ ナットウ？ どんなもの？」

「刺身は新鮮な生魚をさばいて、調理せずにそのまま食べるんだ。納豆は、大豆を腐らせて……いや、発酵させたものだよ。」

まあ、とシンシアはまた驚きの声を上げた。

「生で魚を食べるの？ 腐った大豆？ そんなことをしたら、お腹を壊してしまわないの？」

亀乃介は声を立てて笑った。たしかに、イギリス人にしてみれば、信じられない食べ物ばかりだろう。

「そういえば、リーチ先生が日本にやって来た直後には、食べ物が口に合わなくてね。パンの行商人が近所に来たら、何をしていてもすつ飛んでいって買ったものだよ。」

食べ物のこと以外にも、リーチが日本にやって来た当初、さまざまな文化や生活習慣の違いに驚いたり、戸惑ったりしたことを、シンシアに語ってきかせた。

シンシアは、ときどき声を上げて笑ったり、びっくりしたりしながら、楽しそうに話に聴き入っていた。

しばらくして、ふと、シンシアの瞳にほんのりと寂しい色が浮かんだ。

亀乃介は、不思議に思って、話をするのを止めた。

「どうしたんだい？」

「ううん。……なんでもないの。」

やはり寂しそうな微笑みを浮かべるのだった。

亀乃介は、さらさらと流れる小川に視線を転じた。清らかな流れが午後の日差しを弾いてきらめいている。

少しまえから気がついていたのだが、シンシアは、ときどきこんなふうに、ふいに寂しそうな表情をする。

病身の母のことを思い出すのか、幼い弟と妹の行く末を案じているのか、わからない。

けれど、亀乃介にはわからない何か——シンシアの胸のうちを冷たく刺す感情の針が、ふと飛び出すことがあるようだった。

シンシアも、ロングスカートの膝小僧を抱いて、小川の流に視線を放っていたが、ふいにつぶやきが聞こえてきた。

「——いつか、あなたは帰ってしまうのね。」

亀乃介は、どきりと胸を鳴らした。かたわらのシンシアに、そっと目を向ける。

彼女は、小川に目を向けたまま、こちらを見ようとはしない。

「それは……どういう意味かな。」

亀乃介の問いかけにシンシアは黙っていたが、やがて、小さなため息をついて、

「だって、あなたは日本人だもの。いつまでもここに在るわけにはいかないでしょう？」

寂しげな声で、そう返した。

シンシアの言葉は、まっすぐに亀乃介の胸を貫いた。

「どうして？ なぜそんなことを言うんだい？ 僕は、いつまでもここに在るよ。だって、リーチ先生が在る場所が、僕が在りたい場所なんだから。」

先生がこの町に在る限り——この場所でポタリーを続ける限り、僕はここに在る。

そんなふうには、亀乃介は言ったのだった。

生涯の師である心を決めたリーチ先生が、セント・アイヴスに骨を埋める覚悟ならば、当然自分もそうである——と、亀乃介は考えていた。

リーチ先生も、カメちゃんはこのさき一生、自分とともにイギリスで暮らして、陶芸を広めるために力になってほしい——と、思っていてくだ

さるはずだ。

リーチとともにイギリスに渡ってきた亀乃介には、自分だけが日本へ帰るといふ考えは、微塵もなかった。

だからこそ、シンシアの言葉に驚いた。

驚きを通り越して、腹立たしいほどだった。

亀乃介は、シンシアに、ずっとここに在るほしい、と言ってもらいたかった。この町で、リーチ先生と、自分とともに生きていつてほしい——と。

ところが、シンシアは、戸惑う亀乃介に向かって言ったのだった。

「それじゃいけないのよ、カメノスケ。いつまでもリーチ先生のそばに在るだけでは、いけないのよ。——それがあなたにはわからないの？」

シンシアの言葉が、亀乃介の胸に重たくのしかかってきた。

その夜、亀乃介は、どうしても眠りにつけず、粗末なベッドの中で、何度も寝返りを打って、悶々としていた。

——何もわからないくせに。

亀乃介は、心の中で、シンシアをなじった。

——僕がどれほど先生とともに辛苦を分かち合ってきたか、知らないくせに。

リーチ先生がいなかったら、僕がここまで在ることだってなかったんだ。リーチ先生が在るところに、これからさきもずっといたからって、何がいけないんだ。

なじりながらも、シンシアの思い詰めたような瞳が迫ってくる。

帰ってくれ、と言いたいのか。それとも、帰らないで、と言っているのか。

亀乃介には、シンシアの本意がわからなかった。

「おい、亀ちゃん。寝られないのか。」

薄い壁板一枚を隔てた向こう側で、濱田の声がした。亀乃介は、むくつと上半身を起こした。

「ああ、すまない……もうすぐ窯焚きだ*かまと思うと、なんだか緊張しちやつて。」

そう言い訳をした。

実際、初めての窯焚きが二日後に迫っていた。濱田のかすかな笑い声が聞こえてきた。

「嘘うそつけ。……シンシアとケンカでもしたんだろう？」

そういうことには勘の鋭い濱田だった。

これ以上言い繕ってもしょうがない。亀乃介は、壁のほうを向いて、正直に言った。

「ケンカしたわけじゃない。でも……なんだか腑ふに落ちないことを言われたんだよ。」

「そうか。なんて言われたんだ？」

亀乃介は、しばらく黙っていたが、

「あなたはいずれ日本に帰るのね、って。」

今度は、しばらく濱田のほうが無言のままだったが、やがて、落ち着いた声が返ってきた。

「どうなんだ、亀ちゃん？ 日本に帰るのか？」

薄い壁越しに飛んできた濱田の質問に、亀乃介は、またしても戸惑った。

自分もはや日本に帰るつもりなど毛頭ないということ、シンシアばかりか、濱田も理解してくれていない。

リーチ先生がいるところだけが、自分の居場所なのに――。

「濱田さんは、どうなんだ？ 日本に帰るつもりなのか？」

亀乃介は、逆に問うてみた。

「リーチ先生は、濱田さんを心底頼りにしている。ポタリーの職人たち

もだ。もちろん、僕だって……濱田さんが日本に帰るなんて、誰も考えていないよ。」

壁の向こう側が、再びしんと静まり返った。⁽³⁾長い沈黙だった。寝てしまったんだろうか、と亀乃介がいぶかった瞬間、

「僕は帰るよ。」

はつきりした声で、答えが返ってきた。

亀乃介は、横になりかけた体を起こして、壁の一点をみつめた。その向こう側で、静かに横たわっている濱田の姿が浮かび上がるのをみつめるかのように。

「僕は、ここで学んだことを日本に持ち帰る。最初から、そう思っていた。」

イギリスへ――セント・アイヴスへ、リーチとともに渡る。

それは、濱田にとって、とてつもない賭けのようなものだった。

自分は、留学の経験もないし、きちんと英語を学んだわけでもない。外国の暮らしがいったいどんなものかわからないし、自己流でどうにか身につけた英語がイギリスで通用するのだろうか、まったく自信がなかった。

それでもなんでも、リーチとともにイギリスへ行ってみよう。――そう決心した。

まったく未知の国であるイギリスに、それもセント・アイヴスなどという聞いたこともない土地に行こうだなんて、普通に考えれば、無茶もいいところである。

しかも、陶芸に適した土がみつかるかどうかもわからない。日本式の窯をほんとうに造れるかどうかはつきりしない。職人がいるかどうかも知らない。職人がいたとして、日本式の陶芸を一から教えられるかどうか、皆目見当かいごがつかない。

何もかも暗中模索、五里霧中だ。

それなのに――。

「僕は、リーチに誘われてすぐ、迷うことなく、よし、行ってみよう」と心に決めた。どうなるかわからないのに。……そんな大胆なことを、どうして僕が即決したのか、亀ちゃん、わかるか？」

濱田の聲が問いかけてきた。亀乃介は、思わず首を横に振った。

「いいや。――どうしてだ？」

ふっと笑う聲が聞こえた気がした。ややあって、濱田の清々^{すがすが}しい声が聞こえてきた。

「わからないからだよ。」

イギリスに渡り、見知らぬ土地で、日本式の陶芸を広める。

どうなることか、まったくわからない。

いままで誰もやったことがないこと、そして自分でもできるかどうかわからないこと。

だからこそ、やる価値があるのだ。

濱田の聲が、続いて聞こえてきた。

「僕は、好奇心が強い。人のやってないことをやってみたい。知らないことがあるなら、知りたい。体験したことがないなら、体験するまでだ。――ひよつとすると、とんでもないことかもしれない。人が聞けば、何をばかな、と笑うかもしれない。だけど、僕はやってみたい、知りたい気持ち止められない。笑われたっていい。失敗したっていい。何もせずに悶々と考え込んでいるよりは、よほどいいじゃないか。」

亀乃介は、壁と向かい合った。

⁽⁴⁾ 胸の奥底から熱いものがこみ上げてきた。同時に、目頭が、じんとしびれて熱くなった。

――やったことがない。行ったことがない。体験したことがない。

だからこそ、やってみる。だからこそ、行ってみる。だからこそ、自分自身で体験してみる。

わからないことは、決して恥じることではない。わからないからこそ、わかるうとしてもがく。つかみとろうとして、何度も宙をつかむ。知ろうとして、学ぶ。

わからないことを肯定することから、すべてが始まるのだ。

「なあ亀ちゃん。――僕たちは、無知で、向こう見ずで、大胆で、とんでもないやつらだろう？ でも、それはすごいことなんじゃないかな。なんだか、わくわくしてこないか。胸の底から、なんだか、こう――。」
ふつつりと言葉が途切れた。やがて、寝息がかすかに聞こえてきた。

(原田マハ「リーチ先生」による)

〔注〕ポタリー――陶芸の工房。

ジャワ米――米の品種の一つ。ジャワ島やインドネシアなどの東

南アジアやイタリヤ、スペインで栽培されている。

行商人――商品を持って売り歩く人。

窯^{かま}焚^{ただ}き――陶器を焼くために窯に火を入れること。

〔問1〕「ううん。……なんでもないので。」とあるが、このときのシンシア

の心情を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 仕事の合間にも親しい付き合いをしている亀乃介が、いつか日本に帰ってしまうことを想像して寂しく思っている。

イ 病身の母や幼い弟妹の将来が不安なのに、それを理解しようとしないう亀乃介の様子を感じとって寂しく思っている。

ウ 日本でのリーチ先生の様子を話してくれる亀乃介に対し、自分には亀乃介に話すことが何もなく寂しく思っている。

エ 亀乃介の話から日本の様子を想像するも、貧しい自分は亀乃介と一緒に日本に行くことはできないと考えて寂しく思っている。

〔問2〕⁽²⁾ シンシアの言葉が、亀乃介の胸に重たくのしかかってきた。とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア リーチ先生に必要とされる嬉しさをやっとな実感できるようになったにもかかわらず、シンシアからそのことを厳しく注意されて、理解しつても納得できない思いを抱いたから。

イ リーチ先生に対して尊敬の念を抱いてきたにもかかわらず、シンシアから先生への敬意を否定されて、不愉快に思いつつも反論するのは難しいことだと考えたから。

ウ リーチ先生とともに生きることを当然と考えていたにもかかわらず、シンシアから思いも寄らない指摘をされて、反発しつつも聞き流すことができなかったから。

エ リーチ先生だけではなくシンシアとも一緒にいたいと考えているにもかかわらず、シンシアが全く気づいていないことに、落胆しつつもどうしたらいいのか分からなかったから。

〔問3〕⁽³⁾ 長い沈黙だった。とあるが、このときの濱田の心情を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分は日本に帰国するはずがないと思いついでいる亀乃介に対して、帰るつもりであることを伝えてもよいかどうか迷っている。

イ 自分を頼りにしていると一方的な都合を押しつける亀乃介に対して、その身勝手な考えをどのように改めさせようかと悩んでいる。

ウ 多くの職人たちが頼りにしていると伝える亀乃介に対して、自分がないと機能しないポタリーの現状を情けなく思っている。

エ 自分の質問には答えないうで逆に日本に帰るのかと聞いてきた亀乃介に対して、真意をはかりかねて不愉快に思っている。

〔問4〕⁽⁴⁾ 胸の奥底から熱いものがこみ上げてきた。とあるが、このときの亀乃介の心情を五十字以内で書け。

〔問5〕 本文の表現を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 擬態語を多用し、陶芸の道を模索しながらも独自の考えを見つけられず、読者には理解しづらい亀乃介の心情を分かりやすく表現している。

イ 主人公の亀乃介だけではなく、陶芸に携わる様々な人物の考え方を交えることで、登場人物たちの陶芸に対する熱い思いを豊かに表現している。

ウ 登場人物の揺らぐ心を表すときは「――」、強い意志を表すときは「……」と使い分けることで、人物の心情をこまやかに表現している。

エ 亀乃介に思わせぶりの態度で接するシンシアと、気遣う濱田を対照的に描くことで、亀乃介に対する両者の関わり方の違いを表現している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

(1) 生き生きと動いている時間は、カレンダー的な時間のなかにはありません。カレンダー的な時間においては、過去も、現在も、未来も、同じ平面上に並んでいます。これはまさに、空間化された時間です。

カレンダーだけを見ても、どこが現在なのかは覚えてきません。どれも同じような数字が並んでいるだけです。どの日も現在でありうるし、過去でも未来でもありえます。

これに対し、生きて動いている時間においては、過去は現在ではないということとははっきりしていますし、現在は過去ではないということもはっきりしています。また、現在は未来ではない、未来は現在ではないということも明白です。過去はもちろん未来ではないし、未来も過去ではありません。このように、生きて動いている時間においては、過去・現在・未来はまったく異質なものであり、同じ平面上に平等に並べることはできないのです。

このように、生きて動いている時間においては、「……でない」、「……でない」という「否定」が重要です。そのような「否定」が時間の核心にあるがゆえに、時間は見ることもつかむこともできないのではないのでしょうか。

(2) 時間は「ある」のか、「ない」のか、という問いが答えにくいのは、この「否定」が時間の核心にあるせいではないのでしょうか。

時間らしい時間は、生きて動いている時間であり、それこそ現実的であり、「リアルに存在している」ように思われます。しかし、その「生きて動いている」ということは、ある種の「否定」によってこそ成り立っているのではないのでしょうか。現在は次々に消え去って、過去になっていきます。現在は、現在として生まれ出たと思っただけ、もう現在では「なく」なり、現在としては「否定」されて、過去になってしまいます。そ

のとき、過去は決して現在では「ない」という否定によって成り立っています。未来もまた、「まだない」という否定によって成り立っています。「まだない」未来は、次々に現在になっていきますが、現在になったときには、それはもう未来では「ない」のです。このように、動いてやまない時間は、至るところ「ない」という否定に貫かれています。では、そのような時間の「生きて動いていること」と「否定」が最も鮮明に見出されるのは、どこにおいてでしょうか？

それは過去でも未来でもなく、「現在」においてではないのでしょうか。過去も未来も、なるほどある意味では存在しません。過去はもうないし、未来はまだありません。しかし、過去は思い出すことができます。思い出、記憶のなかには、過去は確かに「ある」ように思われます。記憶だけでなく、「記録」のなかにも、過去は保存されているように見えます。過去そのものではないとしても、過去の痕跡がそこに残されています。過去は動かないまま、じっとしています。

未来は、「予想」とか「計画」という形で、やはりそれなりに「ある」とみなされています。予想されたり計画されたりするものも、それが「現在」になるまでは、あるいは私に変更するまでは、じっと不動のまま保持することができません。

このように、過去と未来が私たちに対してそれなりに「動かないもの」としてあるのに対し、まさしく現在こそ、絶えず「生き生きと動いているもの」であると言えます。

過去と未来は、それなりに動かないものとして思い浮かべることができ、そのように思い浮かべる仕方、それなりに「つかむ」ことができ、そのものです。しかし、「現在」こそ最もつかみがたく、最も「存在することから遠いとも言えます。次のように考えてみましょう。

現在を取り押さえるために、「今は夜である」と紙に書き留めてみます。夜にこれを書き留めれば、それは紛れもない真理です。しかし、何時間

かして、昼になってからその紙を見たら、「今は夜である」という言葉は、気が抜けてしまっています。それを書いたときには、「夜」としての今が確かにあると思われました。しかし、翌日の昼になったら、「今は昼である」ということの方が真実で、「今は夜である」というのは空虚な言葉にすぎないのです。

このように、「今」を取り押さえようとしても無駄であると言えます。取り押さえたものは、もう「今」ではなく、「過去」なのです。

一方では、「過去はもうない、未来はまだない、〈ある〉のは現在だけだ」と言うことができます。しかし、それにもかかわらず、その現在は、刻一刻と過ぎ去り、少しも取り押さえることができません。過去と未来は、記憶や予期という形で、それなりに取り押さえられますが、現在は少しも取り押さえることができません。この意味では、現在こそ「ない」のではないかと、言いたくなります。

あらためて問うてみましょう。時間はいつたい、あるのでしょうか、ないのでしょいか。

ここで、「ある」か「ない」かを問題にするときに、「つかんで取り押さえよう」とする私たちの考え方そのものが問題なのではないか、という疑問を投げかけることができます。つかんで、取り押さえようとする限り、時間はあるのかないのかわからなくなります。むしろ私たちが時間を経験する仕方は、「つかむ」のとは決定的に異なる仕方なのではないでしょうか。

もしそうだとしたら、それはどのような仕方なのでしょうか？

少し考えてみましょう。生き生きとした時間においては、現在を「つかむ」ことはできません。現在と過去と未来を、それぞれつかんでおいて、並べて置くことはできません（これがカレンダーの時間との違いです）。未来は次々に現在になり、現在は次々に過去になってしまいます。ここには、未来が現在になる、現在が過去になる、という移行、転換があり

ます。この意味では、未来と現在、現在と過去は互いにつながっているわけです。つながっているにもかかわらず、「未来はまだ現在ではない」「過去はもう現在ではない」という仕方、それぞれの間には鋭い分断があります。過去・現在・未来は、「つながって」いて、しかも同時に、「切れている」のです。

つながっていて、しかも同時に切れているというのは、謎かけのようですが、そういうあり方は、実は私たちの身近にもあります。それは、「交差」というあり方です。

二本の直線が一点で交差してしましましょう。その交差点は、二本の直線がつながっている点であると言えます。しかし同時に、それぞれの直線は、この交差点において、もう一つの直線によって「切断されている」と見ることもできます。

それでは、過去・現在・未来からなる時間を、「交差」として捉えることは可能でしょうか。「現在」とは、過去と未来とが交差する、その「交差点」にほかならないと考えることができます。過去は次々に古い過去へとつながり、一つの連鎖を成しています。未来も、次々に遠い未来へとつながります。交差点そのものは、つかめません。現在が、過去と未来との交差点だとしたら、現在そのものは過去ではないし、未来でもありません。それ自体は過去でも未来でもありませんが、過去と未来がまさに切り結ぶ地点です。

過去も未来も実在するわけではありませんが、過去は記憶としてつかむことができます。未来は予想や計画、目論見^{もくろみ}としてつかむことができます。つまり、心のなかに保持し、じっくりとそれを眺めること、吟味することができます。しかし現在は、目の前にあるのに、つかむことはできません。それを保持することはできません。それは、私のコントロール下に置けないものです。³⁾それはまさに、現在が「交差」としてあ

るからなのです。

この「交差」としての現在は、「ある」と「ない」との交差点でもありません。

現在としての現在は一瞬もとどめることができません。しかし、それにもかかわらず時間はリアルであり、現在は最もリアルに感じられます。そのリアリティは、むしろ私がつかめないこと、私がコントロールできないことにおいてこそあるのではないのでしょうか。

現在がリアルで、動いているということ、時間がリアルに流れているということは、絶対につかめないということ、つかめないのに現にそこにあるという、その特有の性格にあります。

現在はないことにおいてある、と言ってもよいでしょう。⁽⁴⁾ 現在は、

あると思った瞬間に、もうありません。いわば、「なくなる」ことにおいてある」のです。もし現在が、「なくなる」ことなく、いつまでも同じ現在であり続けたら、それは「時間が止まっている」ということになるでしょう。現在が次々に消えるからこそ、「時間がある」と言えます。そして、このように次々に「なくなる」ことにおいてこそ、「現在がある」とも言えるのです。

ですから、現在としての時間は、あることとないこと、有と無とが交差する点であると言ってもよいでしょう。現在それ自体は、有でも無でもありません。あくまで有と無との交差点なのです。

(田口茂「交差」としての時間」による)

〔問1〕⁽¹⁾ 生き生きと動いている時間は、カレンダー的な時間のなかにはありません。とあるが、「カレンダー的な時間」とはどのような時間か。

次のうちから最も適切なものを選び。

ア 現在を軸として、過去はすでに起こったこと、未来はこれから起こることとして同じ平面上に並べた時間。

イ 過去・現在・未来が順番に入れ替わりながら、全体としては循環するものとして同じ平面上に並べた時間。

ウ 過去・現在・未来という違いをなくし、対象として捉えることができるように同じ平面上に並べた時間。

エ 過去を出発点として、現在を経由して未来に向かって一方方向に流れていくものとして同じ平面上に並べた時間。

〔問2〕⁽²⁾ 時間は「ある」のか、「ない」のか、という問いが答えにくいのは、この「否定」が時間の核心にあるせいではないでしょうか。と

あるが、「否定」が時間の核心にある」と筆者が考えるのはなぜか。

次のうちから最も適切なものを選び。

ア 生きて動いている時間は、過去・現在・未来が互いに対立して否定し合って成り立つものだから。

イ 生きて動いている時間が存在することを述べようとすると、否定的な表現を避けることができないから。

ウ 生きて動いている時間があるのかないのかに答えようとすると、最終的にはないと言えないから。

エ 生きて動いている時間は、時計の数字によってその存在を把握し証明できるものではないから。

〔問3〕⁽³⁾ それはまさに、現在が「交差」としてあるからなのです。とあるが、「現在が『交差』としてある」とはどういうことか。五十字以内で書け。

〔問4〕 本文の表現と構成を説明したものととして、最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 時間というテーマについて、感覚的な表現や比喻表現を用いながら、論理よりも筆者自身の直観に基づいて主張を展開している。

イ 時間というテーマについて、はじめに筆者の主張を述べ、根拠となる具体例を列挙しながら論証して主張を展開している。

ウ 時間というテーマについて、起承転結という整った構成の中で、倒置や繰り返し表現を用いながら主張を展開している。

エ 時間というテーマについて、多様な角度から筆者の見解を示し、対比的な構成や逆説的な表現を用いながら主張を展開している。

〔問5〕⁽⁴⁾ 現在は、あると思った瞬間に、もうありません。とあるが、このような「現在」という時間のあり方について、具体的な例を挙げて、あなたの考えを二百四十字以内で書け。なお、や。や。「などのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文中に引用された古文の後の□内の文章は、現代語訳である。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

さくら散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける 紀貫之⁽¹⁾

あまりにも有名な「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候。」ではじまる「再び歌よみに与ふる書」において子規は、「空に知られぬ雪」とは駄洒落にて候。」と右の歌を一言で切り棄てた。なぜ子規はこの歌を一刀両断にしたのか、そこに行くまえに貫之の作品そのものの確認をしておこう。『拾遺集』巻一にあるこの歌は木村正中の口語訳を引用すると、「桜の散る木の下風は寒くないのに、空には思いがけない雪が降ってくるよ。」ということになる。口語訳からもわかるように、「空に知られぬ雪」という見立てが、この歌の眼目であるといっている。そして子規の否定にもかかわらず、この歌は史的には決して評価が低くない。高いからこそ子規のターゲットとして選ばれたといえるほどである。

平安期屈指の歌論家である藤原公任は、この歌を貫之第一の秀歌と考え、前十五番歌台でも勝ちの指定席に配置したほど評価をしていた。

子規は『万葉集』を評価する理由を「当時の人は質樸にして特別に優美なる歌を詠み出でんと工夫するにはあらず、只、思ふ所感ずる所を直に歌となしたる者と思しく何れの歌も真摯質樸一点の俗気を帯びず」

当時の人は素朴であって、特別に優美な歌を詠み出そうと工夫するのではない。ただただ、思うことや感じingることを直接に歌にしたものと思われ、どの歌も真面目で素朴であり、少しも俗っぽさを含んでない。

と述べている。「只、思ふ所感ずる所を直に」歌にするという所からは、「空に知られぬ雪」は遠い所にある。つまり子規的な情景再現力の直接性という点からは、この歌とその第四句は致命的であるといえる。子規のような形で情景再現力を考えるかぎり、「空に知られぬ雪」は一語で切り棄てられて当然ということになる。

貫之には、そしてたぶん公任にも、しかし情景再現力の直接性は少しも大切なことではなかった。情景の再現ということにこだわっていえば、彼らは、「只、思ふ所感ずる所を直に歌となしたる」作業の中からは、情景はうまく再現できないと考えていた。

貫之たちは、むしろ〈散る花〉が〈散る花〉として歌の表面に露出することは恥ずかしいことであり、〈散る花〉が迂回して他の何かをかえこむこと、かかえこんで臙化し、美の多重性になること、そういう表現の過程こそが大切だと考えていた。だから〈散る花〉を〈散る花〉と直述しないで、どれだけ非直接性にできるかという点こそ、この歌における貫之の関心事だった。花を雪に迂回させてゆきつく所には、情景再現の直接性はなくとも、イメージの複合から生まれる美の沃野はひらけていると考えられていた。別な言い方をすると、そうしたイメージの複合の中から浮かびあがる典型の中にこそ、情景もよりよく再現されると考えていた。この差が子規と公任の評価の差に直結した。

花を雪に迂回させてイメージの複合にするという方法は貫之の時代の大変な詩的方法だったから、例は他からもたくさん示すことができる。ここでは前出の木村正中校注の『貫之集』からいくつかを例示して、それが貫之の大切な方法だったことを確認しておこう。

木の間より風にまかせて降る雪を春くるまでは花かとぞ見る

木の間から、風が吹くのまかせて降る雪を、春が来るまでは花かと思つて見ることだ。

春こねど草木に花の咲くほどは降りくる雪の心なりけり

春はまだ来ないけれども、草木に積もつた雪が花の咲いているように見える様子は、降ってくる雪の心づかいなのだなあ。

散りがたの花見るときは冬ならぬわが衣手に雪ぞ降りける

散る頃の花を見ていると、冬ではないのに、私の袖に雪が降ることだ。

⁽³⁾ 引用していると少々鼻について、だんだん子規と同じ気分になってくる。

おそらく子規は「空に知られぬ雪」が、貫之をはじめとする古今集の大切な方法を示しているからこそ、それを見逃さなかつたのだろう。どのように大切な方法だつたのか、再確認をすると、⁽⁴⁾ 貫之たちは桜の美が桜の美に終始することはとても野暮^{やぼ}がまんでできないことだつた。ところが子規は、桜が、桜に終始しないで雪のイメージをまとして重層化することがどうしても我慢できなかった。桜の美しさは桜の美しさだけで、それだけで子規の前にあらわれなければならないものだつた。そこ

にこそ革新されなければならない和歌の急所が存在していた。

こうした子規の評価が妥当かどうかは、ここでは重要ではない。それは別のレベルでいえば、言葉が情景のミックスに行かないで、どれだけ現実の情景に貼りつくことができるか、そこに A の関心があり、言葉が現実の情景から迂回してどれだけ多重性の美になれるか、そこに B の関心があつたということである。

写真にこだわりつづけた子規のモチーフをそこから見ると、要するに C における写真とは、言葉が情景に貼りつくための方法論であつたと言える。

(三枝昂之「うたの水脈」による)

〔注〕有之候——「ございます」。

子規——正岡子規。明治時代の文学者。

拾遺集——拾遺和歌集のこと。平安時代の歌集。

木村正中——国文学者。

歌合——平安時代に行われた、歌の優劣で勝敗を決める競技。

臙化——ぼんやりとしたものに変化すること。

沃野——よく肥えた土地。

〔問1〕⁽¹⁾ 空に知られぬ雪ぞ降りけるとは、どのような景色の様子をたとえたものか。実際の景色の様子を十字以内で答えよ。

〔問2〕⁽²⁾ 子規のような形で情景再現力を考えるかぎり、「空に知られぬ雪」は一語で切り棄てられて当然ということになる。とあるが、ここでいう「一語」に相当する言葉は次のうちではどれか。

- ア 下手
- イ 致命的
- ウ 一刀両断
- エ 駄洒落だじゃれ

〔問3〕⁽³⁾ 引用していると少々鼻について、だんだん子規と同じ気分になってくる。とあるが、筆者が「子規と同じ気分になってくる」とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 貫之の歌がどれも同じで面白みがなく、退屈な気分になってくる。
- イ 貫之は歌がどれもあまりにも下手なので、不愉快になってくる。
- ウ イメージを直接的に表現する貫之の歌が、安易なものに思えてくる。
- エ イメージを複合させる貫之の方法が、不自然なものに思えてくる。

〔問4〕⁽⁴⁾ 貫之たちは桜の美が桜の美に終始することはとても野暮やぼでがまんできないことだった。とあるが、ここでいう「野暮」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

- ア 不条理
- イ 無風流
- ウ 無神経
- エ 不首尾

〔問5〕 本文中の A → C に入る人物名の組み合わせとして、最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア A 子規 B 貫之 C 子規
- イ A 貫之 B 子規 C 子規
- ウ A 子規 B 貫之 C 貫之
- エ A 貫之 B 子規 C 貫之

5	4	3	2	1
4	4	4	4	6

5
12

4	3	2	1
5	8	4	4

5	4	3	2	1
5	8	4	4	4

5				
(問5)	(問4)	(問3)	(問2)	(問1)
ア	イ	エ	エ	桜
				が
				風
				に
				散
				る
				様
				子
				。

4									
(問5)									
な	に	ぐ	い	間		て	す	ま	
い	し	に	う	は	勉	い	が	す	筆
と	、	消	事	消	強	る	、	。	者
思	未	え	実	え	に	ー	そ	そ	が
い	来	る	は	て	打	と	れ	れ	言
ま	へ	と	未	い	ち	い	は	が	う
す	の	し	来	き	込	う	同	一	よ
	成	て	に	ま	ん	こ	時	生	う
	果	も	残	す	だ	と	に	き	に
	に	、	り	が	り	で	我	て	確
	つ	そ	ま	、	、	も	々	い	か
	な	の	す	そ	部	あ	人	る	に
	が	瞬	。	の	活	り	間	時	一
	る	間	だ	時	動	ま	は	間	現
	よ	の	か	に	に	す	一	一	在
	う	中	ら	生	熱	。	現	と	一
	努	で	現	き	中		在	い	は
	力	生	在	て	し		と	う	一
	し	き	と	活	た		い	こ	瞬
	な	る	い	動	り		う	と	で
	け	こ	う	し	し		瞬	だ	消
	れ	と	時	て	て		間	と	え
	ば	を	間	い	い		を	思	て
	な	大	が	た	る		生	い	い
	ら	切	す	と	時		き	ま	き

240 (正答例 233字)

200

100

25

4			
(問4)	(問3)	(問2)	(問1)
エ	ー	現	
	あ	在	
	る	は	
	ー	未	
	と	来	
	一	と	
	な	過	
	い	去	
	ー	を	
	を	つ	
	つ	な	
	な	ぎ	
	ぐ	な	
	も	が	
	の	ら	
	で	切	
	あ	断	
	る	し	
	と	、	
	い	同	
	う	時	
	こ	に	
	と	現	
	。	在	
		の	

(正答例)

50

3				
(問5)	(問4)	(問3)	(問2)	(問1)
イ	た	分		
	考	か		
	え	ら		
	方	な		
	に	い		
	共	か		
	鳴	ら		
	し	こ		
	、	そ		
	激	や		
	し	っ		
	く	て		
	心	み		
	を	る		
	揺	と		
	さ	い		
	ぶ	う		
	ら	、		
	れ	思		
	て	い		
	い	も		
	る	し		
	。	な		
		か		
		っ		

(正答例)

50

2	
1) カナメ	要
2) チクバ	竹馬
3) メイジョウ	名状
4) フウブツシ	風物詩
5) イミシンチョウ	意味深長

1
2
2
2
2
2
2

1	
1) 貪(る)	むさぼる
2) 折節	おりふし
3) 性根	しょうね
4) 世間体	せけんてい
5) 青息吐息	あおいきといき

1
2
2
2
2
2
2

正答表 国語